世界を変える？！

人間学のキーワード

クィア
Queer

新ヶ江章友（しんがえあきとも）　名古屋市立大学男女共同参画推進センター特任助教

あるエピソードから始めよう。わたしが調査でインタビューした男性Aは、自分を異性愛者だと認識している。しかしAの性欲の対象は、女装した男性である。女装した男性は、いつも女装をしているわけではない。女装は単なる趣味である。ある人から見れば、女装をした「男性」に性欲を感じるのだから、Aは「同性愛者」だと思うかもしれない。だがAは、「異性愛者」だと自認する。あえていえば、自分は「変態」だと。ここで彼がいう「変態」が、「クィア」の意味に近い。「クィア」とは、わかりやすくいえば「変態」である。

しかしここで、「わたしは変態です！」と安易に自己を規定してしまったら、つまりクィアをアイデンティティとしてしまったら、クィア・スタディーズの目標とは若干ずれてしまう。一九九〇年代に誕生したクィア・スタディーズという学問は、特定の人びとを特定のアイデンティティに縛り付けることを拒否することから始まるからである。

このことは、クィア・スタディーズを生み出した母体であるレズビアン／ゲイ・スタディーズと比較するとはっきりする。レズビアン／ゲイ・スタディーズは、レズビアンやゲイというアイデンティティにどこまでもこだわる。彼らは、「同性愛者」は、古代ギリシアや江戸時代の日本など、いつの時代にもどこの場所にも存在したのだと主張する。

だがクィア・スタディーズは、レズビアン／ゲイ・スタディーズのそのような立場に「待った」をかける。クィア・スタディーズは、ある特定の人びとがレズビアンやゲイだと自認するよう仕向ける現代における状況、つまり性と自己のアイデンティティを縛り付ける権力のあり方が問題なのだと考えるのだ。古代ギリシアや江戸時代の日本において同性間で性行為をおこなっていた人びとは、現代社会に生きるゲイやレズビアンとはまったく異なった経験をしている。そもそも、彼ら彼女らは「同性愛者」だと自認することもない。同性とセックスをしたからといって悩んだりするのは現代人特有なのだ。

したがって、ゲイ、レズビアン、トランスジェンダー、トランスセクシュアル、バイセクシュアル、アセクシュアル……などと性的アイデンティティを永遠に細分化しながら、それらをすべて含むカテゴリーを「クィア」とするのは、クィア・スタディーズそのものの成立過程からいえば間違っているといえるかもしれない（「クィア・ネイション」という社会的運動として、そのような連帯はたしかにありえるのかもしれないが）。

クィアの新しさは、必ずしも性に限定されないアイデンティティをめぐる問題（人種、宗教、階級など）にも応用可能なことにある。近年の民族や宗教的な対立の根源には、人びとのアイデンティティを一元的に固定化するアイデンティティ・ポリティクスがはらむ問題とも関係していよう。「変態」は世界を変えることができるのか？ それができると信じ、そのことを真剣に問おうとする姿勢こそ、クィアが目指すところなのである。